

# 『今月の天候と農作業』

通巻第5566号  
4月号  
平成26年 3月 27日発行  
宮崎県  
宮崎地方気象台



## 【九州南部1か月予報】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

## 【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	20	40	40
降水量	九州南部	40	30	30
日照時間	九州南部	30	30	40

## 【概要】

天気は数日の周期で変わるでしょう。

向こう1か月の平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率60%です。

<1週目の予報> 3月29日(土)～4月4日(金)

九州南部では、平年に比べて晴れの日が少ないでしょう。

※詳しくは、週間天気予報 (<http://www.jma.go.jp/jp/week/>) を参照してください。

<2週目の予報> 4月5日(土)～4月11日(金)

天気は数日の周期で変わり、平年に比べて晴れの日が多いでしょう。

<3週目から4週目の予報> 4月12日(土)～4月25日(金)

天気は数日の周期で変わるでしょう。

## 普通作物

### ◆ 早期水稲

---

#### 1 水管理

田植え直後は、水温上昇対策が重要です。活着までの約一週間は、葉からの水分蒸散量を少なくするため深水管理とし、その後も低温時は深水で被害回避に努めます。

#### 2 病虫害対策

いもち病防除等のために苗箱に薬剤を処理して移植します。共同育苗では既に処理されている場合もあるので確認しましょう。余り苗は葉いもちの発生源となるので、補植が終了したら早めに処分しましょう。ジャンボタニシ発生田では、除草剤散布期間を考慮し浅水管理としたり、薬剤による防除を行います。

#### 3 除草剤の使用

ラベルの記載内容をよく確認して適切に使用しましょう。除草剤にはノビエの葉期で処理晩限が標記されています。ヒエはまばらに発生し生育しますが、散布時期は最も生育の早いヒエを基準にします。代掻きから移植までの日数が長かったり、気温が高い年はノビエの生育が早くなるので注意します。徒長苗や寒害に遭った苗は弱っているので、処理期限内まで苗の回復を待って散布しましょう。薬剤の拡散や十分な効果のために、処理時は定められた水深を確保します。散布前には畔や水尻から漏水がないか確認し、散布後は掛け流しにせず一週間は水尻を閉め止水しましょう。

### ◆ 麦類

---

赤かび病防除のため小麦では穂揃期（開花期）に、二条大麦では穂揃期から7～10日後（蒴殻抽出期）に防除し、その7日目頃に2回目の防除を行います。

収穫までの登熟日数は、出穂後小麦で45日、二条大麦で40日くらいです。湿害を回避して収量の安定化のため、作溝するなど排水対策を徹底しましょう。

（鎌田 博人）

## 施設野菜

### ◆ きゅうり

---

日中の気温が上昇し、日射しも強くなるため、蒸散量が多くなりますので、かん水量を多くします。また、葉に直射光線が当たると、葉の老化や葉焼け症等の発生につながりますので、日中は内張カーテンを利用し日射量を調節します。特に、ハウス内が乾燥しやすい条件となり曲り果や尻細果り果等の発生につながりますので、ハウス内が乾燥している場合には、通路散水等による湿度確保に努めます。

### ◆ ピーマン

---

夜温も上昇し、内張カーテンを下ろすと加温機の作動時間が短くなり、ハウス内の湿度が高まり病害が発生しやすい条件が続きますので、ハウス外の最低気温が14℃以上の場合には、内カーテンは開放し、暖房機が稼働するように管理します。また、強光線による日焼け果等の発生防止のため日中は内カーテンを利用することで、日射量を調節するとともに、換気に努め、ハウス内の温度を30℃以下で管理します。

茎葉が繁茂し、光線の透過不足等により白果の発生や赤果の発生が多くなるとともに、成り疲れ等によるうどんこ病の発生が懸念されます。適期収穫に心掛けるとともに、着果のない中枝や老化枝、主枝上部の徒長枝など光線を遮っている茎葉の整枝・せん定を行います。また、土壌水分が不足すると草勢が著しく低下するのでこまめなかん水・追肥による草勢維持に努めます。

### ◆ トマト類

---

ミニトマトは気温上昇にともない裂果が多くなるので、かん水量に注意します。また、空中湿度を下げるため日中の換気を徹底し、収穫遅れがないよう適期収穫に努めます。大玉トマトは、高温で乾燥すると尻腐果の発生が多くなるのでかん水量を多くします。また、草勢が低下すると小玉果となり、軟果玉や裂果が発生しますので追肥が遅れないように注意します。

### ◆ いちご

---

次年度の育苗時期となりますが、重要病害である炭疽病の発生による苗不足等は、いちご生産に大きな打撃となります。炭疽病を発生させないため、感染していない健全な親株を使用するとともに、感染の疑いのある場合には、早期に除去処分するなど、万全の対策が必要となります。

(郡司 孝幸)

## 葉茎根菜類・いも類

### ◆ 栽培ほ場の土壌水分の確保

---

今月は上旬からマルチ栽培のかんしょ、さといもの植付け及び各種夏野菜のは種適期となります。土壌が乾燥した状態でマルチ被覆を行うと、発芽不良や生育障害、品質低下につながりますので適当な土壌水分（手で握って団子になる程度）の時にマルチ畝立てを行いましょう。

### ◆ スイートコーン

---

大型・小型トンネル栽培は、4月上・中旬の雄穂抽出期が追肥の時期となります。雄穂が出始めたらチッソ成分で5～6kgを追肥しましょう。追肥の時期が遅れると効果がありませんので適期に施用することが重要となります。雄穂抽出から10日から2週間後に雌穂（絹糸）が抽出し、その部分が果実となりますが、ボリュームがあり先端まで充実したスイートコーンを生産するためには、土壌水分が必要となりますので、通路への湛水等を行うとともに、トンネル内の高温による葉焼け等を防止するため、ビニルの除去及び開閉管理には細心の注意を払いましょう。また、株元からの分けつは、光合成による養分確保を行いますので、除去しないようにしましょう。

### ◆ さといも

---

早生種のマルチ栽培は萌芽の時期となります。萌芽を始めたならマルチに穴を開けて芽出しをおこないます。また、中生さといもは植付期となりますが、マルチ内が乾燥していると、芋肥大期の生理障害等を助長しますので、マルチ被覆前の適度な土壌水分が必要となります。

### ◆ 食用かんしょ

---

マルチ栽培の植え付け時期となります。苗床は外気にならしかん水も徐々に減らし苗の馴化を図ります。上旬は遅霜や平均気温が不足することから挿苗後の活着が悪く、欠株も生じやすくなります。採苗は午後からとし、挿苗予定の3～5日前に苗を採苗し、取り置き苗を曇雨天で暖かい日に植え付けします。

### ◆ ばれいしょ

---

萌芽～生育期です。定期的にアブラムシ、疫病の予防を行います。

### ◆ オクラ

---

中旬以降が播種期となります。上旬は気温が低いため、立ち枯れ病が多発

しやすくなります。早播きする場合はトンネル被覆など地温を上げる対策が必要です。

(河野 健次郎)

## 果樹

### 1 常緑果樹

---

#### ◆ かんきつ全般

今年は着花量が少ないことが予想されます。着花数の少ない樹では、新芽との養分競合によって花芽の発育不良や生理落果が助長されます。発芽後に、花の着生の無い枝は、前年枝の基部から速やかに除去しましょう。

また最近では、発芽から開花までの期間が短く、花の充実不足に伴う生理落果が見られます。花の充実のため、開花期までに窒素主体の葉面散布を数回行いましょう。

#### ◆ 完熟きんかん

剪定の終わっていない園は、急いで実施しましょう。たっぷりのかん水、春肥の施用、土壌改良資材や完熟堆肥等の有機物の投入によって樹勢回復を図りましょう。結果枝の充実を図るために、新梢の発芽期から窒素主体の葉面散布を数回行いましょう。

#### ◆ 日向夏

日向夏の結果安定には、人工受粉の実施が必須となります。適切な条件で花粉を採取し、精製してから受粉に利用しましょう。精製した花粉は発芽率の調査をした上で、適正な倍率に希釈してから受粉に利用しましょう。

#### ◆ マンゴー

収穫が近づくにつれて果皮が弱くなり、結露によって表面の細胞が破裂し、やに果が増加してきます。早朝の換気や敷きわら、ヒートポンプを利用した除湿等による湿度調節によって結露を防止しましょう。

また、新芽の発生の増加にあわせてアザミウマ類の発生が多くなります。発生した新芽をすべて除去し、アザミウマ類の発生を防止しましょう。

### 2 落葉果樹

---

#### ◆ かき

摘蕾は生理落果後の摘果に比べて、樹体養分の確保や翌年の花芽分化に有

効です。開花始め頃から二分咲までの間に実施しましょう。1結果枝当たり1花を原則とし、長い結果枝には2～3花とします。

#### ◆ なし

なしの摘果は初期肥大に大きく影響を与えるので、早期に実施しましょう。開花10日頃から予備摘果として1果そう当たり1果に摘果し、満開1ヶ月までに3～4芽に1果を目安とし仕上げ摘果を実施しましょう。

(山口 和典)

## 花き

### ◆ 電照ギク

---

日中の気温が高くなる時期ですので、ハウスの換気を徹底して茎葉のしまった水揚げの良い切り花にします。曇天が続くと湿度が高まり、白さび病が発生しやすくなりますので定期的な予防が必要です。また、害虫の発生も多くなってくるので、定期的な防除を心がけて下さい。

秋ギクの親株育成の時期です。育苗は作型と穂冷蔵の有無等の条件を考慮し、所要日数を計算して計画的に作業を進めて下さい。

### ◆ 夏秋ギク

---

8月出荷作型の挿し芽を中旬から行います順次行います。過剰な肥料の投入は生理障害の原因となりますので、事前に土壌分析を実施して投入量を決めて下さい。5～6月出荷作型の「フローラル優香」は、低温により貫生花の発生が増加しますので、4月いっぱいまでは10℃、消灯後3週間程度は16℃を保つようにして下さい。ジベレリンの散布は系統により回数、濃度を考慮しましょう。

### ◆ スイートピー

---

受粉から子実の肥大期になります。つる下げを行い、受粉時期のかん水、施肥管理は草勢を見て、必要に応じて液肥を施用し、莢が大きくなり始めたら徐々に薄い液肥を施用して下さい。

### ◆ ホオズキ

---

7月出荷予定の作型では中～下旬にはマルハナバチを導入し着果の促進を図りましょう。また、最低温度が10℃を下回ると、花粉の発芽が悪く着果が不良となりますので、温度管理には注意しましょう。立ち枯れ性病害は、生育初期からの防除がポイントですので必ず防除を行いましょう。

## ◆ シキミ

---

春芽の萌芽時期になります。定期的な防除を実施し、黒シミ斑点病やサビダニ類の発生を抑えましょう。

## ◆ ラナンキュラス

---

出荷が終了したほ場で球根養成に入る場合は、ウイルス罹病株を抜き取り、廃棄します。

養成株については、蕾を摘除し、球根の肥大を促し、その後徐々にかん水頻度を減らします。

(中村 広)

## 畜産

### ◆ 家畜

---

今月は、天気と気温がめまぐるしく変わるなど、日々の変動が大きいのが特徴です。気温の大きな変化は、幼畜にとってストレスになりますので、温湿度に十分気を配り、暖かい日中に換気するなど家畜の体調管理には十分に気を付けましょう。

ハエなどの害虫が活動を始める時期です。近年、サシバエによる被害が多く報告されています。サシバエによる吸血で家畜は大きなストレスを受け、また様々な病原菌の媒介も起こります。牛舎の清掃・消毒と、害虫の発生源となるたい肥の切り返しが重要です。たい肥の切り返して発酵温度を上げることにより、良質なたい肥の製造はもとより堆肥の中にいる幼虫・サナギの殺虫にも効果的です。

### ◆ 飼料作物

---

今月はとうもろこし・ソルガムの播種時期です。自給飼料の確保のため、計画的な作付けを行いましょ。台風や天候不良などのリスク分散の点からも、作付時期や収穫時期が重ならないよう品種を違えて作付けするようにしましょ。また、適正施肥、栽培基準を守るとともに、除草剤の使用に当たっては、他の作物へ飛散しないようドリフト対策を徹底しましょ。イタリアンライグラスの生育が盛んな時期になります。イタリアンライグラスの1番草は栄養価が高く、子牛用の粗飼料として最適ですので、晴天が続く時期に良質の乾草を確保します。なお、収穫したイタリアンライグラスに硝酸態窒素の含有率が高いことがあるので注意します。葉の色が通常より青い場合

などは、最寄りの農業改良普及センターにご相談下さい。

豚流行性下痢（PED）が続発しています。引き続き家畜防疫の徹底をお願いします。

（須崎 哲也）

## 特用作物

### ◆ 茶

---

#### 1 防霜対策

一番茶の生育に合わせた設定温度の確認と共に、防霜ファンの首振り角度や回転方向、スプリンクラーヘッドの詰まり等を再確認し、人為的ミスによる被害がないように注意しましょう。

#### 2 施肥と防除

芽出し肥は、硫安等の速効性肥料を摘採の25日前までに散布します。

カンザワハダニは気温の上昇とともに密度が増加しますので、発生状況を確認し、地区の栽培暦に準じて葉裏にかかるように薬剤を散布します。また、ツマグロアオカスミカメやコミカンアブラムシなどの発生にも注意しましょう。

#### 3 一番茶の摘採及び製造

4月中旬頃からは一番茶の摘採が始まります。燃料費の上昇や価格低迷の中、単価アップのためには良質茶の生産が不可欠です。茶工場の処理能力や一番茶の生育状況・降雨等を考慮し、摘み遅れにならないように摘採計画を立てて適期摘採を心がけましょう。

また、事前に摘採機の刃研ぎや、製茶機の点検、清掃、試運転等を行い、トラブル回避に努めると共に、摘採時には、摘採袋等への生葉の詰め過ぎは避け、摘採後は速やかに茶工場へ持ち込み欠陥のない荒茶製造に努めましょう。併せて、異物混入防止対策にも万全を期して下さい。

#### 4 チャトゲコナジラミの発生に注意して下さい。

チャトゲコナジラミは全国で発生が増加しており、九州でも大分県、熊本県、鹿児島県と本県を取り囲むように発生しています。茶園でこの害虫が発生すると茶の葉にすす病が発生し茶の品質低下を招くことから、以下の項目に注意して茶園を観察し、見慣れない虫を発見した場合には、最寄りの農業改良普及センター等の茶関係機関へ連絡して下さい。

①成虫は新芽に群がるので、茶園では新芽を観察する。



- ②茶園のうね間にあるクモの巣などを観察する。
- ③摘採袋や生葉コンテナの周囲を観察する。

(佐藤 邦彦)

## ◆ しいたけ

---

### 1 選別

乾しいたけは、用途に応じて取引されるので、商品価値を高めて販売するためにも、規格表を参考に必ず選別を行います。特に、次の点に注意しましょう。

- ①異物（虫、金属類等）は絶対入れない。
- ②乾燥不良、虫害、カビ、黒子など規格外品は絶対に混ぜない。
- ③3号以下を他のサイズに混ぜない。
- ④バレと縁に巻きがあるものとは別々にする。
- ⑤できるだけ種菌、採取時期、日和子、雨子別に行う。
- ⑥丸形と変形とは区別する。
- ⑦雨の日など湿度の高い時には行わない。

### 2 箱詰め

箱詰めは、最初からたくさん入れずに、まず2分入れて揺すり込み、さらに4分、6分、8分と入れ、最後に11分ほど入れて丹念に揺すり込みます。箱詰めがゆるいと、輸送途中で欠け葉を生じ、商品価値の低下を招く恐れがありますので注意が必要です。

### 3 採取

気象情報に注意しながら適期採取に努めましょう。

(小田 三保)

## ◆ たばこ

---

今月は、土寄や収穫・乾燥に向けた準備が主な作業となります。

1 土寄は、植付け1ヶ月後程度（最大葉が触れ合う状態になった頃）に実施しましょう。時期が早すぎると幹が傷つき、腰折病等の病害発生の原因となります。また、遅すぎると、肥料吸収が遅れ、作柄が晩作化します。

不定根の発達を促進し本葉系を充実させるために、土寄は確実に実施しましょう。特にローラー土寄を行なった際には、土が寄せられているか確認し、株元までしっかり土寄せを行いましょう。

ほ地内に水が溜まると、生育不良や病害発生の原因となりますので、排水対策に努めましょう

2 収穫・乾燥へ向けて作業場・貯蔵庫の清掃、使用物品の点検更新、及び乾燥機の点検・空焚きを実施しましょう。

3 異物混入防止のため、植付け穴のちぎれそうなマルチや、ほ地内におちているマルチ片を回収しましょう。

4 本年は黄斑えそ病発生防止に向けての防虫ネット設置や、共同防除に向けた話し合いを行いましょ。

農薬を使用する際には「たばこ用農薬の使用基準」を遵守し、使用後は「農薬使用実績票」等に必ず記帳しましょう。

(松元 貴光)

### **内容の詳細について**

---

4月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県営農支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

**☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。**

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

## 向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
早期水稲	いもち病	—	置き苗は、いもち病の発生源や伝染源となるので早めに処分します。箱施薬をしていないほ場で、イネミズゾウムシの発生が目立ち始めたら粒剤の水面施用を行います。 スクミリンゴガイの生息数が多い場合は、捕殺あるいは粒剤を水面施用します。また、用排水路からの侵入を防ぐため、水の出入口にネットを設置します。
	イネミズゾウムシ スクミリンゴガイ	— —	
野菜・工芸作物	アブラムシ類	やや少	各種のウイルス病を媒介するので、早期発見・防除に努めます。
冬春きゅうり	べと病 うどんこ病 褐斑病	やや多 並 やや少	いずれの病害も罹病葉は伝染源となるので、適宜摘葉し、ほ場外に持ち出します。  キュウリ黄化えそ病の感染株を確認した場合は、速やかに罹病株を抜き取り、ビニール袋等に入れて完全に枯れるまで密封処理します。また、本病を媒介するミナミキイロアザミウマは、卵・幼虫・蛹・成虫が混在し、卵と蛹には薬剤がかかりにくいので最少でも7日間隔で3回の連続防除を行います。
	黄化えそ病 (MYSV)	前年、前々 年より多い	
	ミナミキイロアザミウマ タバココナジラミ類	やや多 並	
冬春ピーマン	うどんこ病 斑点病 黒枯病	並 並 前年、前々 年と同程度	いずれの病害も発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、予防・初期防除に重点をおきます。また、罹病した茎葉は重要な伝染源となるので速やかに除去します。 アザミウマ類は、気温の上昇とともに増殖しやすくなるので、発生初期に防除を行い、中～多発生のは場では短い間隔で定期的に薬剤散布を行います。特にヒラズハナアザミウマの発生が多く、本虫は主に花に生息するため、着花の少ない時期に丁寧に防除すると効果が高まります。
	アザミウマ類 タバココナジラミ類	やや多 やや少	
冬春トマト	灰色かび病 葉かび病 トマト黄化葉巻病 (TYLCV)	並 並 前年、前々 年と同程度	今後、加温機の稼働時間が短くなり、果実等が結露しやすくなるので、循環扇を作動させる等施設内環境の改善に努めます。 タバココナジラミ類は、気温の上昇に伴い活動・増殖が活発になります。近年、トマト黄化葉巻病など本種によって媒介されるウイルス病が問題となっていますので、各人が防除を徹底し、地域全体の密度低下に努めます。
	タバココナジラミ類	並	
冬春いちご	うどんこ病 灰色かび病	やや多 やや少	株整理後の葉数が少なくなった時に、薬剤散布を行うと効果が高まります。いずれも薬剤抵抗性が発達しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用します。 特にオンシツコナジラミについては、地域により薬剤感受性の低下が確認されているので、地区の普及指導員や技術員の情報を参考にして防除する必要があります。
	ハダニ類 オンシツコナジラミ	やや多 前年より少ない	
カンキツ	そうか病 かいよう病	— —	いずれの病害も、罹病した枝葉は重要な伝染源となるので徹底的に除去します。 ミカンハダニの要防除水準は、寄生葉率30%あるいは葉当たり寄生虫数0.5～1頭です。
	ミカンハダニ	やや少	
茶	カンザワハダニ	やや少	一番茶萌芽期以降発生が多い場合には、農薬使用基準の摘採前日数等に注意して防除します。

1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。  
2) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、<http://www.jpnn.ne.jp/miyazaki>です。